沖縄タイムス教育賞 正賞2氏・1団体 奨励賞2氏・1団体の紹介

贈呈式24日タイムスホール

子どもと共に学び歩む

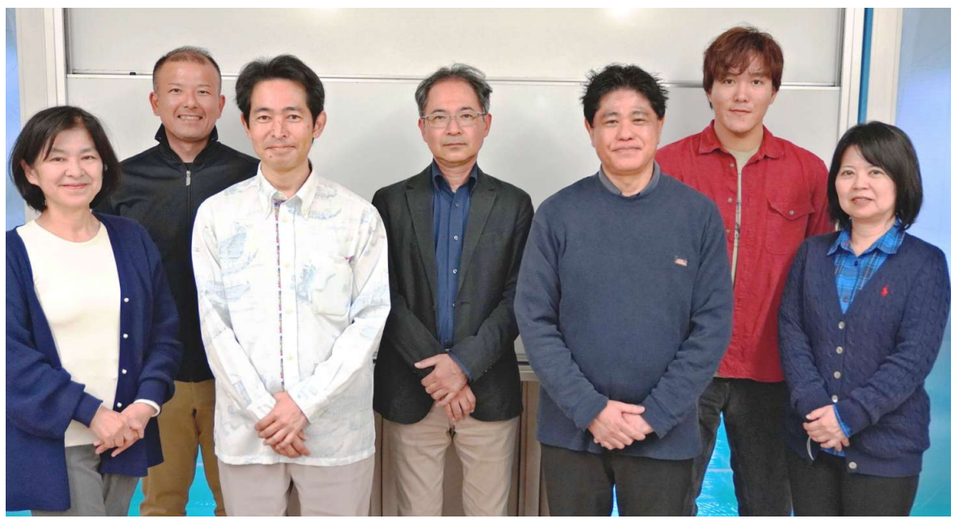
県内の教育分野で優れた研究、実践を続け、顕著な成果を上げている個人、団体を顕彰する第63回沖縄タイムス教育賞に、教育賞正賞2氏・1団体、教育奨励賞2氏・1団体の計4氏・2団体が選ばれた。受賞者の活動や抱負などを紹介する。

贈呈式は24日午後6時半から、那覇市久茂地のタイムスホールで開催する。関係者のほか、一般参加も受け付ける。入場無料。問い合わせは沖縄タイムス社事業局文化事業部、電話098（860）3588。

「検定」で楽しい学び提供

正賞

沖縄歴史教育研究会



1995年に設立され、昨年30周年を迎えた。当時、高校教諭だった新城俊昭さんと、大学生になった那覇高校時代の教え子計7人の勉強会からスタートした。これまで沖縄の歴史や文化の研究成果を広く、分かりやすく県民に浸透させようと地道な活動を続けている。20～50代の高校教諭を中心に10人程度で構成。月に1度集まり、勉強会や活動の話し合いを持っている。

全国各地で行われている「ご当地検定」の草分け的な存在として、2005年から一般向けの「琉球・沖縄検定」を毎年1回実施。高校生向けも20年から始めた。また、5年ごとに高校生を対象にした平和教育や、日本復帰の節目に歴史に関するアンケートをそれぞれ行い、分析を公表。琉球・沖縄の歴史や文化を紹介する書籍も刊行してきた。

副会長の仲村顕さんは、これまでの歩みを振り返り「あっという間だったが、会としてここまで成長できた。現場の先生方にフィードバックしていくという方向性は間違っていなかった」とうなずく。会長で読谷高校教諭の西銘章さんは「無理をせず身の丈に合った活動をしている。今後も生徒たちに還元できる活動を地道にしていきたい」と話す。

現在顧問の新城さんは「自分たちの住む沖縄の歴史や文化を学ぶことは探究心や思考力を養うことにつながる。単に歴史を知るだけではなく、現在の世界情勢や将来を考えていけるよう、さらに裾野を広げていってほしい」と今後の活動に期待を込めた。

（社会部・新垣亮）

設立から30年を超え、「地道な活動を続けていきたい」と語る沖縄歴史教育研究会のメンバー＝7日、那覇市内

生徒主体の平和学習支援



正賞

金城睦さん（53）

首里高校「Neo同好会」顧問

薫陶を受けた、いずれも元高校教諭で沖縄歴史教育研究会（沖歴教）顧問の新城俊昭さんや、作家の大城貞俊さんらが歴代受賞者に名を連ねていることもあり喜びもひとしおだ。

Neo同好会は戦後80年の昨年、中学生を対象にした平和学習を実践した。事前アンケートや、ペープサート（紙人形劇）を取り入れるなど生徒の成長段階に応じて改善を重ねる。他方で、沖縄を代表する作家の故・大城立裕さんについての論文を発表するなど研究者としての顔も持つ。2011年からは同じく正賞に輝いた沖歴教の会員となり、高校生アンケートの集計や分析などを担う。

大学時代は沖縄について学ぶことを避けてきた。しかし、沖縄と向き合う先輩たちの姿に「沖縄のアイデンティティーを知らずして沖縄の教員と言えるのか」と考えるようになった。母方の祖父は沖縄戦で亡くなった。昨年亡くなった母親の悔しさや悲しさは計り知れない。体験談を聞いたことも原点だと思う。受賞を機に「これからも地域教材を扱った授業づくりに携わっていきたい」と意欲を新たにした。

（社会部・新垣亮）

◇◇

きんじょう・あつし　1972年生まれ。嘉手納町出身。96年琉球大学卒業。99年に県立高校国語科教諭に。2020年には同大教育学部大学院修了。22年から県立首里高校に勤務。

首里高校「Ｎｅｏ同好会」の顧問。生徒が主体的につくる平和学習のワークショップ型授業の実践や那覇市観光協会と連携した首里城ガイドツアーなどに取り組む生徒を支え、興味や関心を引き出してきた。

「生徒が受け身ではなく主体的に問いを立て、共に考えていくのがこれからの学び。知的好奇心が旺盛な生徒たちにこれからも応えていきたい」と話す。

「生徒の知的好奇心に応えていきたい」と意欲を新たにする金城睦さん＝9日、那覇市・首里高校

障がいある子に寄り添う

正賞

識名盛安さん（62）

中部農林高等支援学校教諭

軽度知的障がいのある生徒と向き合う中で「彼らには働く力があり、社会に貢献できる存在であることを伝えたい」という理念を下に教育実践を重ねてきた。専門の農業の知識を生かし、地域一体となって美化活動に取り組んだ。進路担当として生徒の意思を重視し、選択の幅を広げた。定年退職後の再雇用を終え、4月からは教職を離れる。

2011年の東日本大震災で被災者を支援しようと沖縄高等特別支援学校で、コリウスの変異種「ちゅらゆめ」の育種開発に取り組んだ。生徒と栽培・販売し、売り上げを寄付した。

現任校では通用門前の花壇を、同じ敷地内にある中部農林高校の生徒も含めて一緒に整備した。花壇には生徒が種から育てた花が美しく咲いている。「良い花を作ろうと没頭する姿を見るとうれしかった」

進路指導では生徒がやりたいことを大事にしている。希望があれば、実習の受け入れ実績がない企業を訪ねて新たな職場を開拓してきた。ある企業では大きなミスをした生徒が、別の企業では本人の特性が適合し力を発揮する例を見てきた。「本人の可能性を大人が決めてはいけない」と力を込める。

小学校の時の交通事故が影響し、自身も身体障がいがある。障害者手帳のこと、得意だったスポーツで挫折した経験、包み隠さず話している。生徒には「自分の障がいと向き合うことが大切。できることとできないことを認識し、周りに頼ってほしい。学校で出会った仲間と支え合って」と伝えている。

（社会部・西平光葉）

◇◇

しきな・もりやす　1963年生まれ。うるま市出身。89年琉球大学大学院農学研究科修了。初任校は県立中部農林高校。県立沖縄高等特別支援学校などを経て、2021年から現職。09年には第46回沖縄タイムス教育賞正賞を受賞。



生徒と一緒に整備した花壇で笑顔を見せる識名盛安さん＝11日、うるま市・中部農林高等支援学校

給食通して心の成長願う

奨励賞

定歳尚子さん（66）

琉球大学付属小学校栄養教諭

給食は、心を育てることもある―。学校栄養職員、栄養教諭として学校給食に携わり44年。食を通した子どもたちとの関わりの中で、そう確信する。

米飯給食が始まる前だった中学2年の頃、弁当を自分で作ったことが今の仕事に就くきっかけになったと感じている。中3の2学期で初めての給食を経験。「みんなと同じご飯を食べられることがうれしかった」

献立を決め、調理員と共に日々の給食を小中学生に提供する。栄養教諭として教壇に立ち、食育の指導にも当たる。「児童生徒だけでなく、先生にも思いを伝えたい」と力を込める。

「調理」と「指導」が両輪として回ることで食育になると考え、調理員、教員、児童など関わる全ての人とのコミュニケーションを大事にする。「なぜこの給食を出しているのか伝えることが大切」と話す。

子どもたちの「おいしかった」「完食したよ」の言葉で「明日も頑張ることができる」とほほ笑んだ。

（中部報道部・勝浦大輔）

◇◇

さだとし・なおこ　1959年生まれ。石垣市出身。佐賀短期大学卒。県内各地の学校栄養職員、栄養教諭、小学校教頭などを経て2020年に栄養教諭として再雇用。22年から現職。



「栄養価はもちろん、楽しくおいしく食べられる給食を作りたい」と話す定歳尚子さん＝9日、西原町・琉球大学付属学校給食施設

定時制で個々に応じ支援

小池隆之さん（57）

中部農林高校定時制教諭

奨励賞

「定時制には全日制にはない魅力がある」と実感を込める。2006年から定時制の教員として、生徒の実態に応じたカリキュラムマネジメントや部活動支援に取り組んできた。「不登校やいじめの経験から定時制を選んだ生徒もいる。似た経験をした人と悩みを共有することに意義がある」

中部農林高校は13年、卒業に必要な単位を4年間で取得する四修制への改編と通年制を導入。単位取得のために授業を詰め込む必要がなくなり、充実した学生生活が送れるようになった。

24年度からは認知トレーニングを取り入れた学校設定科目「パワーアップタイム」を開設。授業前に実施することで、ホームルームの参加率が上がり、頭の切り替えにも役立っている。

部活動ではボランティア、eスポーツ、写真、イラスト、模型の顧問を兼任する。今後、全日制や高等支援学校との交流の場を増やすのが目標だ。「集団が苦手な子もいつかは社会に出る。一歩でも前に進む勇気を持ってもらいたい」

（社会部・西平光葉）

◇◇

こいけ・たかゆき　1968年生まれ。長野県岡谷市出身。91年琉球大学理学部海洋学科卒。2006年に中部農林高校定時制に赴任し、コザ高校定時制を経て、20年から現任。



生徒の自主性を尊重した部活動や能力を引き出す学習に取り組む小池隆之さん＝11日、うるま市・中部農林高校

地域と協働 学びを支える

奨励賞

チーム安富祖校



地域ボランティアの指導の下、稲作体験をする安富祖小学校の児童＝3月、恩納村安富祖（提供）

校区内の水田を使った米作り体験、ビーチクリーン、浜下り行事に伝統の「三月菓子」作り―。恩納村立安富祖小学校は「ふるさとの良さに気付き、守り継承する児童の育成」を掲げ、地域連携教育に力を入れている。特長は「チーム安富祖校」を合言葉に、講師の地域の人たちが協働的な立場で参加していることだ。そのため教職員の異動に左右されず、活動が長年にわたって続いている。

當山幸宏さん（68）は稲作体験に20年ほど協力している。20代の若者から「小学生の時の稲作体験、今でも覚えています」と声をかけられたことも。「学校の応援団としてみんなで取り組んでいる。子どもたちには地元の良さを感じてほしい」と話した。

山内久江校長は、取り組みが継続できている背景には関わった地域の人々、これまで勤務した校長や職員の尽力があったから、と感謝する。「地域で児童の学びを支えていただき、本当に感謝している。受賞できてとてもうれしい。今後も地域との連携を大切にしていきたい」と語った。

（社会部・大門雅子、佐次田直人通信員）

生徒の自己肯定感高める

講評

与那原良彦選考委員長

第63回（2025年度）沖縄タイムス教育賞は11件の応募がありました。厳正な審査の結果、正賞3件、奨励賞3件が決定しました。歴史・平和教育の充実や児童生徒の主体性を促す学習、地域と密接に連携した活動、生徒の自己肯定感を高める指導などが高く評価されました。

正賞に選ばれた沖縄歴史教育研究会（西銘章会長）は1995年の設立以来、「琉球・沖縄検定」などで沖縄・琉球の歴史研究の成果を一般の方、学生らに普及させ、学校教育の枠を超え、市民レベルの歴史意識向上に貢献しました。

平和教育や琉球・沖縄の歴史・文化に関する高校生アンケートを5年に1度調査し、公表しています。高校生の変容が分析できる調査結果は教育界だけではなく、沖縄社会全体に大きな影響を与えています。

同じく正賞の県立首里高校教諭の金城睦さんは、平和教育や歴史教育での蓄積を基に、生徒が平和学習のつくり手として発信する活動を構築した実践は「極めて独創的」と評価されました。首里高校生でつくる同好会の活動に助言し、高校生自身が授業をつくる平和学習型ワークショップを支援、高校生ガイドなどの活躍につなげています。沖縄歴史教育研究会の一員として活動する金城さんの研究成果と経験を融合させ、生徒の主体性を引き出しています。

正賞の中部農林高等支援学校教諭の識名盛安さんは、農業高校教諭として培った専門的な知識を効果的に生かし、軽度の知的障がいがある生徒と共に学校周辺の植栽や美化活動に取り組むほか、プロ野球キャンプ地の植栽などに関わり、地域の一員として貢献できる場を広げています。

識名さんは2009年、農業専攻課程でのランなど園芸・作物栽培の指導で第46回沖縄タイムス教育賞を受賞しています。今回は、職場開拓を含めた特別支援学校での実績が評価され、2度目の受賞になりました。

教育奨励賞には、食育を推進した方や学校をSDGs活動の拠点として活動する団体、定時制高校のキャリア教育を充実させた方が選ばれました。

受賞を逃した中にも優れた指導・活動がうかがえる推薦が数多くありました。

一方、教育実践で解決したケースや子どもに与えた影響、成長の過程などを具体的に示す資料の充実が課題に挙げられました。選考は①実践・研究歴や継続性②独創性③児童生徒やほかの教師、地域社会に及ぼす影響・貢献度④子どもの変容（具体的な成長、改善）⑤保護者や地域社会との連携―などを総合的に判断します。各基準での教育効果を示す教材や資料をそろえ、改めて応募をしていただきたいです。

（沖縄タイムス社文化事業本部長）

紙面編集・大江和宏